

木々がいつの間にかどンドン色づき、秋も深まってまいりました。現在会員登録数 4,186 人さま。次号は 12 月 20 日発行の予定です／

＋-----◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

＋-----＋

■ ----- ■
【1】お知らせ

● フォーラム「児童文学とは何かを問い続けて 三宅興子の仕事を顧みる」
三宅興子さん（当財団前理事長、児童文学研究者）の業績を顧みることで、英語圏を軸にした児童文学・児童文化の歴史を振り返り、これからの子どもの本のありようについて考えるフォーラムを開催します。

日 時：12月17日（日）13：00～16：00

会 場：大阪府立中央図書館 多目的室

講 師：多田昌美、藤井佳子、松下宏子

定 員：会場 60 人（申し込み先着順） 参加費：1000 円

主 催：I I C L O 後 援：大阪府立中央図書館

詳細・お申し込みは↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/02_lecture/index.html#miyakeforum

〔同時開催〕企画展示「子どもの本のはじまり－三宅興子 英語圏児童文学コレクションから－」

会 期：開催中～12月27日（水） 開館時間にご覧いただけます

場 所：大阪府立中央図書館 展示コーナーA・B、国際児童文学館

主 催：大阪府立中央図書館 国際児童文学館 ※I I C L O協力

<https://www.library.pref.osaka.jp/site/jibunkan/hajimari2023.html>

● 講演会「中由美子と中国児童文学の世界」

中国児童文学翻訳者である中由美子さんのお仕事を振り返り、中国語圏児童文学の魅力について語り合います。

日 時：11月26日（日）13：30～16：00

会 場：大阪府立中央図書館 多目的室 および オンライン

登壇：秦文君（作家、中日児童文学美術交流中心会長）他 ※通訳付き
定員：会場 60 人、オンライン（Zoom）100 人 参加費：1000 円
主催：日中児童文学美術交流センター、中国児童文学研究会、IICLO
詳細・お申し込みは→ Peatix <https://nakayumikorec.peatix.com/>

● 寄付金を募集しています

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いいたします。

※詳細は → http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html

※Syncable（シンカブル）＝継続寄付（毎年／毎月）、単発寄付が選べます。
→ <https://syncable.biz/associate/19800701/>

● YouTube「大阪国際児童文学振興財団 公式チャンネル IICLO」

<https://www.youtube.com/@iiclol196>

公開内容一覧は → http://www.iiclo.or.jp/ml_youtube/index.html

● 当財団公式 X（Twitter） → https://twitter.com/IICLO_News

■ ----- ■
【2】コラム
■ ----- ■

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Takeo's Talk

『月さんとザザさん』 角野栄子/作・絵 小学館 2023年10月 対象年齢：小学校中学年以上

*今回のゲストは当財団理事長の宮川健郎さん（T）です。

あらすじ：おばあさんのザザさんはいつも文句ばかりいっているので、ザザさんが住んでいるスミコさんという名の家が家出をしようとする。ザザさんとスミコさんがけんかをしていると、月さんが現れて、時々やってきてお話をしてくれると言い、とりあえず、ザザさんたちのけんかは止まる。月さんは、約束どおり、時々ザザさんの家にやってきて、「夕やけ 小やけでやけこげで……やけこげあ～なが あきましたあ……」と歌った少女が空の穴に落ちた話や、ザザさんの子どもの頃に家にあった緑の椅子の話などをしてくれる。また、月だけでなく、金星や雨もザザさんの家にやってくる。

T：月さんはひねくれ者のザザさんに折々お話をしてくれます。全 15 章からなっていますが、この折々のリズムがいいなと思います。

Y：おっしゃるとおり、月の満ち欠けがでてくる本だと、規則正しく月が太ったりやせたりするのに、いろいろな大きさの月さんが不規則にやってくるところが、自由な感じがしました。

T：そういう意味で、続けて読む本というより、章ごとに読む本、チャプター

ブックのように書かれていて、一話ずつを読んで楽しめる本になっています。

Y：私がいちばんおもしろかったのは、ザザさんの人物像でした。作品の中でザザさんが改心したりせず、最後まで月さんに鋭い突っ込みを入れる、ひねくれ屋で気の強いおばあさんだったところがいいなあと思いました。

T：とはいえ、ザザさんが月さんのお話に導かれて幼い頃に大切に思っていた緑の椅子に再会し、その近所に引っ越してからは少し気持ちが落ち着いたということも書かれています。

Y：そうですね。お父さんが座って幼いザザさんをだっこして子守歌を歌ってくれた椅子に再会したことで、ザザさんの心が潤ったように感じました。それでも、一言言わずにはいられないザザさんが楽しかったのです。

T：どうしてザザさんはそんなにひねくれてるんだろうね。

Y：私にとっては、人間だれしも、思うようにならなかつたり、イライラしたりすることがいっぱいあって、その怒りをストレートに出しているのがザザさんのように思いました。

T：一人暮らしで寂しいところもあったのかもしれませんが。

Y：ザザさんという名前も、家の名前がスミコさんという昭和的で人間臭い名前なのもおもしろかったです。

T：絵も角野さん。ユーモラスで味わいがあります。そして、表紙の色はいちご色。2023年11月3日にオープンした東京都江戸川区の角野さんの児童文学館「魔法の文学館」の基調となる色と重なっています。

Y：この本を読んで改めてどんなに年をとったって、どんなにイライラしたって、ユーモラスなお話があれば、生きていけるという気持ちになりました。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第99回「さるのこしかけ」

山男と小猿

ある夕方、櫓夫は裏の大きな栗の木に、白いきのこを見つけます。

〈これがさるのこしかけだ。けれどもこいつへ腰をかけるようなやつなら、すいぶん小さな猿だ。そして、まん中にかけるのがきつと小猿の大將で、両わきにかけるのは、ただの兵隊にちがいない〉と、ひとりごとを言います。

すると、きのこの上に、軍服を纏った小猿が三匹、ひょっこりあらわれて腰掛けます。真ん中にいた小猿は大將の軍服を着ており、小さい勲章を六つばかり提げています。あとの小猿は小さすぎて肩章さえわかりません。小猿の大將は手帳を出して〈おまえが櫓夫か。ふん。何歳になる。〉と横柄に話しかけます。櫓夫がばかばかしくなって文句を言うと、小猿は一転丁重な姿勢で櫓夫を栗の木の中へ案内します。中は空洞で、上の方へはしご段が続いています。小猿と櫓夫が電燈に彩られた階段を駆け上がると、そこは昼間の種山ヶ原。忽ち草原のあちこちから小猿がもちやもちや集まってきて、ほどなく軍事演習が始まります。

乱暴な演習に榎夫が驚いていると、小猿はみんな小さな綱を出して榎夫を縛りあげ、高く胴上げをし、榎夫を林の地面に落とそうとします。覚悟を決めた榎夫が自分の家の方角を見定めるとき、〈危いっ。何をする〉という大きな声がして、〈茶色のぼさぼさの髪と巨きな赤い顔〉の山男に榎夫は受け留められます。ふと気づくとそこはうちの前の草原で誰もおらず、夜になっていました。お母さんの榎夫を呼ぶ声が聞こえてきて、物語は終わります。

「さるのこしかけ」を見つけた榎夫は、〈いくら小猿の大將が威張ったって、僕のにぎりこぶしの位もないのだ〉と思い、小猿に〈もっと語を丁寧にしないと僕は返事なんかしないぞ〉〈腰掛けのまま下へ落すぞ〉と言います。傲岸不遜な態度の榎夫ですが、これが後半の落下（転落）へとつながっているように思われます。子どもといえども、驕り高ぶる者がやがて破滅に至る構図は、賢治童話においてはしばしば見られるものです。舞台（種山ヶ原）や夢、登場人物としての榎夫など、別作品「種山ヶ原」との共通性も指摘されています。

作品「種山ヶ原」では、主人公は夢の中で山男に襲われ、刀で山男を刺し殺しますが、本作では榎夫は山男から守られています。これは、土地の子どもである“榎夫”（木の名前を冠する）が山男と近い関係にあることを示すものであり、組織的な軍事演習を行う小猿たちと山男の対立を描くものともいえます。自然の側、神の側に属する山男にとっては、樹木に寄生し、ダメージを与えるという「さるのこしかけ」（小猿）のほうが、決して容認できない敵だったのかもしれませんが。（ペ吉）

（本文の引用は、新潮文庫『注文の多い料理店』によりました。）

《3》子どもの本の珠玉のことば 53

「ああ、いい におい！ どこに こんな すみれが あったの？」

「きみの あたまの なかに。きみが すみれの においを だいすきだから。」

（「びーだまのまほう」 まど・みちお/作 太田大八/絵 『キンダーおはなしえほん』第3集3 フレーベル館 1970年3月1日 p.12）

てつおくんが一人で留守番をしていてビー玉を目の前にして、「こんな びーだまなんか おもしろく ないや」と言うと、ビー玉が「ぼく まほうが つかえるんだぞ」と言います。そして、てつおくんがビー玉をぎゅっとにぎると、てつおくんの手が鳥の巣になって、ビー玉が卵になって、そこから小鳥が出てきます。小鳥は、鼻のあなにとびこんで、くしゃみといっしょにすみれの花をくわえて出てきます。そこで、引用のことばになります。

小鳥は、耳に飛び込んでせみを連れてきて、口に飛び込んでぶどうをくわえてきて、目に飛び込んで星をくわえてきます。最後にてつおくんが「ママをだして きて！」というのと、小鳥はビー玉に戻り、でてきたものは消えます。

そして、ママがもどってきます。てつおくんは、「ママ、ぼくの あたまからでてきたの？」とママに聞きます。

幼稚園でもらってきて大好きだった作品です。大阪府立中央図書館国際児童文学館にあったので再会できました。作家の名前は覚えていませんでしたが、緑色のビー玉の不思議さに圧倒され、すみれの花の匂いをかいだような気持ちになったことを覚えています。鼻のあなに入るところがユーモラスで特に好きでした。そして、てつおの頭の中にすみれの花が描かれている絵にあこがれの気持ちを抱きました。

今読み返すと、まど・みちおの「あとがき」にあるように、「私は人間及びすべての哺乳動物がその生活力の源泉として持つ「五感」をタネにしました。目で見、耳で聞き、鼻で嗅ぎ、手で触り、舌で味わうという五感の働きは、原始の輝きに満ち、永遠にみずみずしく、この中のどのひとつをとってみても、私たちが深い喜びで一杯にしないものはありません。どのひとつとして私たちが、「生きよ、生きよ」と励まさないものはありません。」という五感が研ぎ澄まされる感覚を描いているということがわかります。そして、てつおなりの方法で世界を理解していることを表現しているということも読み取れます。また、最後のてつおの一言から、てつおがいかにママを愛しているかが伝わります。

けれど、5歳の私は、ビー玉が卵に変身し、鳥が生まれることに心がはずみ、そのことを表現した大胆な絵に心を遊ばせたのでした。(Y)

《4》 行って来ました！

京都 d d d ギャラリーで来年1月7日まで開催されている企画展「はみだす。とびこえる。絵本編集者 筒井大介の仕事」に行ってきました。絵本編集者の筒井大介さんがこれまでに編集された代表的な絵本の原画、ラフ、編集時のメモなどが、一緒に仕事をした52人の作家の言葉とともに展示され、作品ごとに筒井さんのコメントも添えられています。

入口を入った通路部分に、きくちちき『ゆきのゆきちゃん』(ミシマ社 12月刊行予定)の使われなかった原画やラフ、色校などが展示されていました。原画にはない銀色を使って印刷した校正用紙があり、絵本の制作過程がわかります。実際の絵本が楽しみになりました。

部屋に入ると、一人の作家に2～3枚ずつくらいの絵本原画が展示されています。エネルギー満ちかつ迫力満点の絵がならんでいて、圧倒されます。長新太や井上洋介、片山健などの絵本界を代表する作家から、つじにぬき、e t oのように、筒井さん主宰のワークショップや絵本塾出身の新人作家まで、筒井さんがいろいろな作家とかかわってきたことがわかります。五十嵐大介や小林エリカなどのマンガ家の作品もあり、異分野の作家を起用することで、筒井さんが絵本の幅を広げてこられたのだと思いました。

全体を見た印象を一言で言うと「自由」。どの作家ものびのびと描いていること、絵本の世界や作品のテーマを追求しながら描いていることが伝わってきました。そして、作品への情熱は、紙の材質や印刷へのこだわりからも感じられ、絵本作品が、作家と編集者の熱い思いで作られていることがよくわかりました。

絵本出版にとっての編集者の大切さを改めて考えながら、また、革新的な絵本に出会えることを期待して会場をあとにしました。(K)

京都 d d d ギャラリー <https://www.dnpfcp.jp/gallery/ddd/>

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第6回

第2章 前川康男先生と今西祐行先生

その3 『肥後の石工』、「一つの花」

童話雑誌『びわの実学校』の校長は、雑誌を主宰されていた坪田譲治先生ですが、副校長は、創刊号からの編集長の前川康男先生（1921～2002年）でしょう。母宮川ひろがはじめて投稿した短編「たからもの」が第16号（1966年5月）に掲載されたあと、作品を見てくださるようになった今西祐行先生（1923～2004年）は、母の担任ということになります。私は、子どものころから、今西先生に、そして、前川先生にもお目にかかる機会がありました。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

今回で、第2章「前川康男先生と今西祐行先生」はおわります。来月は休載させていただきます、2024年1月配信の第161号からは第3章「あまんきみこさん」です。

<本編はこちらから>

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html

■-----■

【3】全国のイベント紹介

■-----■

● 2023年度絵本学会 絵本研究會「瀬田貞二さんについて」

日時：12月16日（土）14：00～16：00 参加費無料、要申し込み

場所：オンライン

講師：斎藤惇夫（作家）

主催：絵本学会 研究委員会

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■ ----- ■
【4】プレゼント

■ ----- ■
今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『月さんとザザさん』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ ご応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/wTrFHBedaw4s3Bus9>

締切は12月11日(月)、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

— | — | — | — | — | — | — | — |

街の装いが、ハロウィンからクリスマスに一変しました。昼間の暑さもようやく収まったと思いきや、秋を追い抜いて、いきなり冬がやってきました。めまぐるしい変化についていくのがたいへんですが、体調管理に気をつけて日々を大切に過ごしたいと思っています。(TA)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp

